

平成19年度職員海外研修報告書



国立大学法人静岡大学

19年度国立大学法人静岡大学職員海外研修報告書

出張期間 2008. 2. 13～2008. 2. 20
訪問先 カナダ（アルバータ大学、ビクトリア大学）
出張者 財務施設部財務企画チーム（決算担当） 杉山洋之
情報学部学務係 大場淳也
学術情報部研究協力・情報図書チーム（COE 担当） 田中理恵

アルバータ大学

アルバータ州の州都エドモントン（人口約 100 万人）の中心部から南東約 1 キロのところに位置しています。カナダの 5 大研究強化大学のひとつであるアルバータ大学は、1908 年に設立され、約 1 世紀にわたり伝統ある教育機関としての業績を築いてきました。州内で最も古く、質の高い教育機関として定評があります。今年は 100 周年を迎え、記念式典などの準備に大忙しとのことでした。その中の 1 つとして、学長が州政府にインフラ整備費約 40 億円の交付申請をしているそうです（州にとっては大した金額ではないとのことでした。）。

全学生数は約 3 万 7 千人、165 の専門分野と 60 以上のプログラムを提供しています。89 ヘクタールの広大なキャンパス内(南北の 2 つをメインに、ダウンタウンにも存在)には 90 棟以上の建物が並び、落ち着いた雰囲気が漂っています。教職員数は約 1 万 1 千人で、勤務時間は 8:30 から 16:30(うち休憩が 1 時間)となっています。

大学の施設は充実しており、留学生のための国際センターがあるほか、多くの学生が利用できる施設があり、娯楽施設としては室内競技トラックを有する通称バタードーム(形状、色が似ているところから)、室内アイススケート場、プール、スカッシュ、バドミントン、バレーボール、テニスコートなどがあります。図書館はカナダ最大のシステムを誇り、蔵書数や視聴覚機器も目を見張るものがあります。

バタードーム



学部の建物も新築された近代的なものと旧来からの歴史が感じられる建築物との調和がとれています。その中でも工学部は規模等において目を見張るものでした。あと、ナノテクノロジーに関する研究施設の誘致にも成功し、州政府などと共同して研究を進めています。また、附属病院も併設されていますし、今現在、物理学部棟も建設中でした。施設についてはぐるっと一回り案内をしていただきましたが、その整備はかなり充実していると思うとともに、これらはやはり予算規模（約1,300億円）、外部資金の獲得額（約750億円）が一桁違うことに起因するものかと痛感させられました。

工学部キャンパス



また、HUBモールと称する小さな街（各種店舗を挟んで、上層が学寮、下層が教室、教官室と一体になっている施設）が南北約150mに渡り、学生が生活するうえではとても便利な施設です。学寮についてもキャンパス内に点在しており、すべての学生を収容できるそうです。また、学内にはお酒が飲めるパブや学生食堂、大学のグッズショップも充実しており、これらの施設は、学外の市民も利用できるようになっています。

HUBモール



キャンパス内にあるパブ



食堂



大学のグッズショップ



以上紹介してまいりました建物の大半が、室内移動を可能とする連結通路が整備されているとともに、建物内は非常に暖かく、氷点下 20~40 度にも耐えられますし、中には半袖で過ごしている学生さんも見受けられました。

それから、大学の電力を賄うための発電所があり、余剰分は州政府に売払いをしているとのことでしたが、その動力として核を利用しているということが気になりました。あと大学構内に L R T (地下鉄) の駅が設けられていて、教職員は無料で乗車ができるそうです。学生も入学時に定額 (基本料) を払えば、いつでも学生証を提示し、自由に乗れます。これは、大学と会社との契約によるもので、すごく福利厚生が充実していると感じました。現在は街から北キャンパスまでの敷設ですが、南キャンパスまで延長予定で工事中でした。

発電所



L R T (地下鉄)



留学生は、今までに 100 以上の国から留学生を迎えているそうです。現在の留学生に占める日本人学生の割合は約 1 割。アジア系としては全体の約 8 割 (中国と韓国がそれぞれ 3 割) を占めています。学校のあるエドモントンには、人口約 100 万人のアルバータ州の州都で、州税がないため生活費を抑えることができ、安全で近代的なので留学に適している場所といえます。ただ、我が国に比べ物価が、少し高く感じられました。

アルバータ大学の皆様にはお忙しい中にもかかわらず親切にご対応いただき、大変感謝しております。



左の写真 国際交流担当スタッフのマイケルさん（左から三番目）、グレッグさん（右から二番目）

右の写真 国際交流担当スタッフのセバスチャンさん（右から二番目）、通訳のオガタさん（左端）

ビクトリア大学

ブリティッシュ・コロンビア州の州都ビクトリア（人口約 30 万人）にある総合大学で、通称 UVic（かつて U of V だった）で親しまれています。学生数約 19,000 人。学部は、商、継続教育、教育、工、芸術学、人間・社会開発、人文、法、医、理、社会科学部で構成されています。街は公園が美しいこと、温暖な気候であること、うさぎなどの小動物が見られることで有名です。学生の志望動機に、中規模大学というサイズ、絵画のような地元の風景、大学で行われるコーポレイティブ教育プログラムなどがあげられているそうです。コーポレイティブ教育プログラムは、カナダで 3 番目に大きいものです。また全国的に有名なのは法学部で、ある雑誌の 2007 年度大学ランキングでは、総合大学部門第 1 位。日本の提携校に明治大学、同志社大学、国立大学法人福島大学、東北学院大学などがあります。本学も工学部が協定を結んでいます。キャンパスはメインとして、グレータービクトリアのゴードンヘッド地区にあり、広さ 403 エーカー (1.6km²) で、オークベイとサーニッチの二つの行政区をまたがっています。キャンパス設計と構想の原案は、サンフランシスコの建築設計会社が作成し、設計思想としては直径 600m の真円の外周をリングロードという道が通り、円の内側に学問用のビルを置き、円の外側は、学生会ビル、寮または住居、スポーツ施設などが独立しているということだそうです。

キャンパス内のあらゆる場所に顔を出すウサギたち。私たちもその例に漏れずお出迎えをしていただきました。学内の文書やメディアのニュースにも顔を出す人気者で、近所のペットの末裔だと考えられているそうです。

キャンパス内お出迎えのうさぎ



キャンパスセンター（事務局）



建物に関しては、数学棟と社会科学棟の工事、新しい科学棟建造と何箇所かで工事をしていました。マクファーソン図書館の増築も行われています。また、多くの住居提供をしており、シングル、ダブル、4人でシェアするアパート(クラスター・ハウジング)、家族用マンションタイプのもの(ラム・ファミリー・ハウジング)があります。大学には 3,200 人の学生が住んでいます。

学生は、ビクトリア市内在住者はもとより他市からの入学者も多く、全員が寮に入れるよう学寮施設が確保されています。また、一年間にかかる費用は、授業料の5千ドル、生活費の1万5千ドルの計約2万ドルが必要になるそうです。経済的に苦しい学生は奨学金制度を利用することもできます（返済しなくてもいいものもあるそうです）。

ビクトリア大学の皆様にはお忙しい中にもかかわらず親切にご対応いただき、大変感謝しております。



ご対応くださいましたビクトリア大学の皆さん

終わりに、

今回の研修出張にご尽力いただきました、事務局長をはじめとします関係者の皆様方に深く感謝をいたします。この研修を通して感じたことですが、簡単な英会話ができればもっとコミュニケーションが取れ、更に充実したものになったことかと思いました。そこで、来年度以降も継続して実施するということでありましたら、是非、事前の語学研修とセット、または語学研修を兼ねての長期的研修などをお考えいただければ、実り多きこととなると思いますので、ご一考いただければ幸いに存じます。

また、今後は個人の向上はもとより大学への貢献もできたらと考えております。本当にどうもありがとうございました。

海外研修報告書(個別研修事項)

1. 財務関係 (財務施設部 杉山)

2. 学務関係 (情報学部 大場)

3. 学術情報関係 (学術情報部 田中)

国立大学法人静岡大学

財務関係研修事項

事項	アルバータ州立アルバータ大学	BC州立ビクトリア大学
Q1 予算のしくみと財源について	<p>年間総予算額約12億ドル(約1,300億円)。</p> <p>60%が州、連邦政府からの助成金、15%が学費収入、15%が雑収入、5%が補助金、5%が投資収入。</p> <p>物価の上昇などに合わせて、授業料をUPする。近年では、3.3%値上げ。授業料は、平均すると約50万円。留学生は、1万6、7千円。</p> <p>教職員の給与は毎年4%のUP。</p> <p>-----</p> <p>公開教育学部150万ドル(約165億円)、学生数8千人、常勤職員140人。</p> <p>30%が大学からの配分、70%が学費収入やコンサルタント料など。</p>	<p>年間総予算額約2億ドル(約220億円)。</p> <p>60%が人件費、30%が研究費、10%が財務費用。</p> <p>授業料は、約50万円。授業料等の学費については、州政府がコントロールしているので、勝手に値上げ、値下げなどはできない。</p>
Q2 決算のしくみと報告について	<p>一会計期間は、4月から3月まで。</p> <p>6月中に年度ファイナンシャルレポート(財務諸表)を州・連邦政府へ提出。</p> <p>監査人は州、連邦政府から派遣されて来る。</p> <p>9月に税金の報告をする。</p>	<p>一会計期間は、4月から3月まで。</p> <p>4月中に年度ファイナンシャルレポート(財務諸表)を州・連邦政府へ提出。</p> <p>監査人は州、連邦政府から派遣されて来る。</p> <p>9月に税金の報告をする。</p>
Q3 月次等の決算報告について	<p>メモ程度のレポートを学内において作成(ビクトリア大学担当者のお話では、改正される予定)。</p> <p>会計検査院のような機関はない。</p>	<p>四半期毎にファイナンシャルレポート(財務諸表)を、州・連邦政府へ提出。</p> <p>会計検査院のような機関はない。</p>
Q4 財務分析と大学運営について	<p>中間期に前年度比較をして、下半期予算執行の調整をする。</p>	

財務関係研修事項

事項	アルバータ州立アルバータ大学	BC州立ビクトリア大学
Q5 経費削減としての取り組み（アウトソーシングも含めた合理化・効率化等）について	システムの更新等による効率化を図る。	
Q6 伝票処理の流れについて	スタッフが入力処理。	
Q7 物品等の発注方法と納品検収確認について	<p>基本はスタッフが発注。緊急時は教員も行なう。請求者が購入申請書を提出。スタッフが受理して物品管理担当者（計画に沿った購入かどうかを確認する。）の許可が必要となる。立替制度もあるし、大学カードでの支払いも行なっている。事後チェックを受け不適当なものは私費扱いとなる。</p> <p>納品確認は、発注者と支払担当スタッフが行なっている。ただし、部局によって違いがある。</p> <p>不正行為をすれば厳しい処分を科す。</p>	<p>基本はスタッフが発注。立替払制度や緊急時は教員も行なうが、2,500カナダドル（約25万円強）の範囲内。ただし、通常のチェックより厳しく4段階で行なう。</p> <p>納品確認はない。支払っていいかの確認はする。すべての責任は発注者にあるため。750万円以上支出した場合は、レポートの提出を義務付けている。また、外部資金関係は出資企業がチェックに来る。</p>
Q8 旅費の支給方法について	<p>基本的には実費支給。ただし、食事代（日当）は、1日45カナダドル（約5千円弱）。</p> <p>宿泊費については上限設定はないが、妥当な金額かのチェックはする。同意書（理由書）なるものが必要となる。</p> <p>基本的には、宿泊費、交通費は契約している旅行会社で手配。企業レートで割安になる。</p> <p>外国出張の場合は、前払（概算払）も行なっている。必要経費を申請。</p>	<p>基本的には実費支給。食事代（日当）は、出張先にもよるが1日48カナダドル（約5千円強）。</p>

学務関係研修事項

アルバータ大学での研修

学務関係に関する照会項目は次の項目を挙げた。

- ① 学生への窓口対応
- ② 時間割の作成
- ③ 新入生ガイダンス
- ④ 単位互換協定
- ⑤ 学務情報システム

学部での対応について照会したかったが、先方大学の都合上、本件については留学生センターの担当者と農学部の担当者と話すことができた。

平成20年2月14日(木)14:00～

アルバータ大学対応者 International Center (国際交流センター)

Gretchen Phillips (グレーチェン フィリップスさん)

左から2番目の女性



アルバータ大学の留学生センターには6人のスタッフがいて大学全体で約3000人いる留学生のケアを担当している。業務内容としては留学生の入国に関する内容・留学生関係の行事の所掌・留学生対応のプログラム指導等がある。

窓口対応を行っている時間は、月火水金が午前8:30から午後4:30で木曜日のみ午後8:00まで開けている。(木曜日は夜間対応の授業があるため)この時間は昼休みも職員が交代で勤務し、窓口は閉じられない。

アルバータ大学は9月から新入生が入学してくるのだが、8月の終わりごろから9月の初めは先述の窓口対応時間を延長している。

留学生からの相談ごとに対応するため職員はカウンセリングに関する研修を受講したり業務に役立つ講習会などに参加している。これは職員が学生時代にあらかじめその資格を

取得している場合もあるが、大学職員となつてからでも学内での関係プログラムを受講することを奨励している点が魅力的だった。また外部の講習会に出席する場合でも職員組合には人事能力向上基金がありその年度予算の範囲内なら補助が支給される制度もあった。

留学生の相談ごとは勉学に関するものも当然あるが諸般の事情から心の問題を抱えることもある。この場合、最悪な状況として自殺が起きることもあるため細心の注意で対応している。学内にはカウンセリングセンターもありそのカウンセラーや留学生の所属している学部の職員と連携することもあるのだが、内容が機密事項となるため、ケースバイケースで対応を分けて行っているようであった。

留学生に対しては3日間をかけて新入生ガイダンスを行っている。このガイダンス時には上級生の学生ボランティアを60人ほど配置してケアしている。ガイダンスでは留学生だけでなくその親に対してもオリエンテーション的な企画を行っている。

留学生は母国によって文化や習慣がちがうためアルバータ大学(あるいはエドモントン市の)ルールを理解できるようガイダンスしている。

平成20年2月15日(金)9:30～

アルバータ大学対応者 Faculty of Agricultural, Life & Environmental Sciences
(農・生活環境科学部)

Leah Wack (リー ワックさん)

左から2番目



写真にある大きな切り株は大学構内にあったものらしい
この切り株の後ろに学生サービスの窓口がある。

アルバータ大学の農・生活環境科学部で学生サービスの窓口には6人のスタッフがいて窓口対応を行っている時間は、午前8：30から午後4：30となっている。現在は昼食時に1時間の窓口を閉じている。以前に昼食時に開けていたが学生が訪ねてくることは多くなくスタッフの人数も少ないため閉じることとなったそうだ。

窓口に来る学生の質問事項の多くは書類の書き方や学習プログラムに関する質問事項となっているが、心の悩みや生活に関する相談ごともある。これらの質問に対して大学側が提供しているサービスを紹介することで対応している。

専門的なカウンセリングが必要と考えられる学生に対しては、カウンセリングセンターへ連絡し対応をお願いしている。

窓口職員がカウンセリング等の資格などを持っているかの質問に対しては、5名が出身大学において教育学や社会学の学位を取得していてカウンセリングに関する学習をした職員もいるようだった。アルバータ大学の担当者の考えとしても、業務内容的にカウンセリングや教育に関するある程度の専門知識はあった方がより良いと感じているようだった。

休学退学に関する質問をしてみたが、休学や退学に関する制度が違っているようで話がかみ合わなかった。アルバータ大学(この場合農・生活環境科学部)では1年間の休学は届を提出すれば無条件で休学できるようだった。単位の修得状態で退学を余儀なくされることもあるようであった。

学生は自分が選択したプログラムごとの目標値(GPA値)に達しない場合、指導を受けることになる。指導対象となるのは評価平均がC未満の学生。まずは学生本人に注意喚起の手紙が送られる。状況がより悪い学生は事務側から直接電話などで連絡を取り指導を受けることとなる。具体的には、学習計画表を提出させるとか取得プログラムを変えるとか転学部させるとかである。

最近では指導を受ける学生が増えているため、そのような学生を対象とした特別プログラム(フレッシュスタートプログラム)を開講し受講を勧めるようになっている。このプログラムは学部に関係なく1・2年生が対象で受講期間は1年間。高校から大学への移行をサポートするような内容が含まれている。

このプログラムをクリアできれば元の学部プログラムに戻ることもできるし、受講中でも限られた範囲なら学部の講義も受講できる。

時間割の原案は学科事務室が作成する。そのデータを学学生在籍登録事務所という管理事務を担当している部署に送り電算システムに登録している。したがって学部の学生サービス担当では把握していなかった。

新入生ガイダンスについては大学全体で2日間かけて実施している。学部固有の情報などはその中で2時間位がある。学生は自由参加だが参加した学生が飽きないようにイベント性を持たせるなどの工夫をしている。

ヴィクトリア大学での研修

学務関係に関する照会項目はアルバータ大学と同じ項目を挙げたが、急な申し込みでもあり学生カウンセリングに関する担当者と話すことができた。

このため今回の研修項目では学生カウンセリングに関することのみを対象とした。

平成20年2月18日(月)13:00～

ヴィクトリア大学対応者 **Counselling Services** (カウンセリング担当)

Joseph A Parsons (ジョセフ パーソンズさん)

(一番右側の男性)



カウンセリング担当の窓口時間は、月曜から金曜の午前8:30から午後4:30となっている。以前は5:30まで開けていたが、あまり意味がなかったようである。昼休みは閉めているが緊急性がある場合は対応している。

カウンセリングは予約制なので窓口が込み合うことはないように感じられた。(カウンセリングが予約なのは本学も同様)

カウンセリングに訪れる学生の問題は次のように分類されるとのことだった。

(重複回答あり)

- 41% ストレス
- 34% 憂うつ感 うつ病
- 33% 心配事 パニック障害
- 30% 人間関係
- 30% 人生に関する事

28% 家族問題

23% 自信喪失

これらは積極的に相談に来る学生の内容であり、一人で引きこもっている場合は、表面に表れなくなる。また、カウンセリングに来る来ないは学生の自由でもある。しかし何らかの兆候があるのでそれを見つけてフォローしたいと考えている。

学部の担当者やゼミの教員からの連絡に基づくものや学生間の関係からカウンセリングサービスに連絡のくるものなどさまざまな形があるが、プライバシーを優先するため、これらの協力体制は一方通行になることが多い。学部の担当者がカウンセリングに関する特別な知識が必要かどうかは分からないが、カウンセリングが必要な学生に接する際の注意のような勉強会はあった方が良く思う。

今年度より成績が落ちた学生をピックアップして連絡を取る方法を始めてみた。その成果は今のところ不明とのことだった。

最も注意が必要な自殺の恐れのある学生に対する場合では、これまでにその兆候があった際には他のカウンセラーと意見交換も行い、さらに危険が高まった場合は病院とも連絡をとって対応しているとのことだった。また、ブリティッシュコロンビア州には自殺に関する対応システムがあり、それを参考にしているとのことだった。

学術情報関係研修事項

研究助成金の関係で、以下の項目について、情報を入手した。

- 配分先の決定方法
- 申請方法（単位）
- 申請時の大学の支援体制、獲得助成金の管理
- 予算の区切り（単年度決算かどうか）
- 中間評価、報告書

【アルバータ州立大学】

平成20年2月14日（木） 9：00～

対応者： City-Region Studies Centre & Government Studies
（都市地域共同センター）

Dr. Douglas Knight（ダグラス・ナイト博士）



この都市地域共同センターは、公開教育学部に属するが、実際は全学の研究者に協力している。また、カナダの他の州政府や、NGO、個人の会社とも協力し合っている。研究協力会員と呼ばれる人たちがいて、センターの情報を彼らに提供しているそうである。

大学の予算の種類としては、（1）州から自動的に配分される運営費交付金、（2）特定の研究課題を助成するための外部資金、（3）寄付金があり、日本とよく似ていた。このうち、（2）研究助成金に焦点を絞って質問した。

配分先（大学）の決定方法は、州、個人、企業から大学に無条件に配分されるものと、各大学からの申請に基づき審査を経て決定されるものの両方があるようだ。研究助成金を配分してくれる連邦政府の2大組織として、「社会科学人類評議会」と「国立科学研究評議会」がある。

申請方法（単位）は、研究者個人や少人数グループが大半である。助成金の金額は、1件につき、1億～5億ドル。最近では、直接の研究予算ではないが、建物の建築等の大学構造に係るものとして、3,000万～4,000万ドルの予算を大学（学長）が申請中である。（大学100年祭のため。）

獲得助成金の管理（予算計画の作成、残高管理等）は、財務部の大勢のスタッフ（会計士、財務計画者等）が行っており、各学部にも財務責任者がいる。これは、本部と部局の関係にあたるようだ。特定の研究で獲得した資金は、まず大学に入金された後、そのうち15%が大学のものとなり、残りが該当学部（研究者）に渡される。

申請時の大学の支援体制としては、「研究サービス事務所」という専門の組織があり、獲得に向けての講演会、学習会等を開催している。申請先の組織を探したり、担当者が研究者に、申請書の書き方等の提案をしたり、研究分野により申請の可否の説明をして判断材料に役立っている。申請書類のチェックは、頼まればする程度、である。

予算は、日本と同様、複数年度計画の場合でも単年度決算である。毎年、はじめに提出した申請書に記載したとおりに執行していくが、残った場合は返納する。

先方がまず一通りの説明をしてくださったので、その後で質問をしていったが、十分な時間がなく、すべての質問を投げかけることができず、残念だった。時間が経つのが思ったよりも早く感じられ、ふと気がつくと1時間が過ぎていた。この研修の初めてのミーティングということもあり、少々緊張した。

【ヴィクトリア州立大学】

平成20年2月18日（月） 9：45～

対応者： Office of Research Services（研究サービス事務所）

Mr. Joaquin Trapero, Ms. Debra Anderson, Ms. Brenda Driedger



研究助成金は、主として連邦政府からの資金だが、他にも資源はたくさんあるそうである。

特定の研究課題のための助成金に個人申請できるが、申請前に学科長・学部長・副学長 (Mr. Richard) の許可が必要であり、最終的には学長の責任となる。ヴィクトリア大学の場合、研究者の個人申請は、現在1件のみである。申請方法は、まず、学内の研究募金に申請し、その後、学外に申請する。カナダ政府からの助成金は、申請者多数のため、多くの大学に配分できるように、配分額は申請額よりも少なくなる。しかし、少数の研究者 (大学) は、多額の助成金を配分される。

事務的な運営費として、大学に約570万円の予算 (人件費) がある。また、学内の研究助成制度があり、連邦政府からまとまった助成金を受領し、それを学内で配分している。画期的な研究のために大きな機械を買う場合は、大学として申請する。

なお、Research Services は、教員の研究費を扱っているが、その他に大学院生のための研究費もあり、これは他の部署が担当している。

年に1回、書類の記入方法をチェックしたり、各分野のアドバイススタッフもいて、そのためのセクションもある。

獲得予算は、研究者が管理するが、大学も管理している。個人申請の場合は、事務 (分野のアドバイススタッフ、Research Services) がアドバイスはするが、あくまでも研究者が管理する。

予算管理以外の事務の役割としては、書類チェック、獲得のための学習会等、本学と同じような支援をしているそうである。

研究期間が2年以上の場合も、全期間の金額を初年度に通知され、毎年4月から3月までの1年分を会計報告するが、残余金は繰越できる。

中間評価はなく、研究終了後の最終報告書を提出するだけである。

また、毎年の報告書は会計関係のみで、研究成果は報告不要であるし、全研究期間の金額を最初に通知されるため、研究成果や報告書が次年度の配分額に影響することはないそうである。この点は日本と大きく異なり、驚いた。

申請から採否の結果通知までの期間は、少額の場合は約3か月～9か月、連邦政府の場合は約4か月～6か月であり、日本はその期間が長いと思っていたが、カナダでも審査期間は結構長いことが分かった。

事務室が行っている研究助成金に関する情報提供として、チラシの掲示や、Web サイトでも検索できるようになっている。

ヴィクトリア大学では、もともと予定していた Research Services のオフィス以外にも、財務サービス、カウンセリングサービスの部署の担当者ともミーティングできることになった。また、通訳の方の到着が遅れるというハプニングもあり、アルバータ大学とほぼ同じ質問をしたが、ヴィクトリア大学においても、思ったよりも時間がとれず、

結果的に、駆け足のミーティングとなった。しかし、事前に質問事項を先方に送っていただいていたおかげで、用意しておいた事項のほぼすべてについて情報を得ることができた。実際は、もう少し詳しく知りたいこともあったが、用意した質問事項が多かったため、今回は、広く浅く情報収集した。

その他、両大学において、財務関係（物品の発注システム、監査制度、決算分析、決算報告）や学生関係（窓口サービス、留学生関係、カウンセリング体制）についても、各部署の担当者からお話を伺うことができ、自分の今の所属部署では直接の関係はないことも、将来何らかの形で役に立つはずだと思い、気づくと自分のことのように熱心にメモをとっていた。

大学の雰囲気としては、まず、アルバータ大学のスケールの大きさに圧倒された。これは雑談の中で伺った話だが、学部の数は18学部、4万人近い学生と、1万人近い教職員がいるとのことだった。また、キャンパスは、敷地や門で仕切られておらず、各学部の建物の間に道路、お店、駅などがあり、まるで大学が一つの町のような感じだった。あらゆる建物を増築したり、廊下でつなげたりしていて、100年の歴史を感じるとともに、その豊富な財源にも驚かされた。

ヴィクトリア大学は、主として、中心の円形の敷地内に建物が点在しているが、私たちが歩いた一部だけを見ても、芝生や木が非常に多く、緑豊かな環境だった。こういう雰囲気なら、学生は落ち着いて勉学に専念しやすいだろうと思った。

今回の参加者は、3人とも海外未経験で、不安が大きかったが、アルバータ大学、ヴィクトリア大学とも、先方の方々がミーティングの設定だけでなく、出迎え・食事等とても丁寧に対応してくださり、無事に1週間の日程を終えることができた。

ただ、時期的に、年度末は多忙のため、出発前も帰着後も通常の業務を滞りなくこなすのがたいへんである。また、出発前に、相手国の教育制度や実情、訪問大学のデータ等を調べるための時間がもう少し欲しかった。事前に調べておけば、的を射た質問ができるし、ミーティングの時間節約にもなると思う。また、相手の大学について下調べもせずに訪問するのは失礼ではないかと感じ、ミーティングの途中でも雑談中でも、先方の方々に申し訳なく思った。

総合的に考えると、短期間ではあったが、今回の研修では、他国の大学の事務組織や教育・研究の支援体制について直接知ることができ、国際的な感覚に触れ、日々の業務や国内の研修では味わうことのできない新鮮な雰囲気の研修だった。今後、この経験を生かし、視野の広い考え方をもち、本学のために勤務していきたいと思う。

今回の研修は、私にとって得るものが非常に大きかったと思う。こういう機会を与えていただき、本当に恵まれていると感じた。